

1. 日本のカトリック共同体は、キリストの気高い子、その証し人であるユスト高山右近の列福の祭典を祝っています。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」というヨハネ福音書 12 章に記されたイエスのことばが、右近の中で実現しています。加えて、「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう」というヨハネ福音書 15 章のことばも、また同様に実現しています。

罪のない良き牧者であり、投獄され、死の判決を受けたイエスのように、その弟子たちも、歴史の中でたびたび迫害され、殺されたのです。ローマ皇帝による最初の迫害から始まり、最近の迫害に至るまで、憎しみと残酷さは、愛と善と兄弟姉妹の絆で結ばれた善意の世界をつねにおとめています。

いつくしみが悪に勝ることは、神の思し召しであり、殉教者は、愛に満ちたキリストの国が信じるに足ることを証ししています。殉教者たちは、迫害する人びとに愛をもって向き合い、そのために祈ることさえしたのです。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言うマタイ福音書 5 章 44 節のことばどおりです。たんに赦しだけではなく、愛と祈りが、敵対する人びとに対する殉教者たちの逆説的な答えになりました。残忍さに対する殉教者の答えは、愛にあふれる親切さです。それは弱々しさではなく、想像を超える強さの現れです。このような方法で、殉教者たちは、罪の汚れのない血によって清め、また豊かないのちの種を蒔くことによって、人間性を善いものに高めます。

日本の教会は、数知れない殉教者の素晴らしい証しによって祝福されています。それはたとえば、聖パウロ三木と同志たち、聖トマス西と同志たち、福者ペトロ岐部とその同志たちです。日本の殉教者たちには、老若男女、武士と一般の人びとなど、あらゆる階層の人びとがいます。福者ユストは、教会における栄光に満ちた最初の殉教者たちがそうであったように、キリストの卓越した証し人です。

2. ここで次の三つについて問うてみましょう。ユスト高山右近とは、だれであったか。そのキリスト者としての神髄はどのように息づいていたか。右近のことばは、現代の私たちにどのような意味があるのか。

ユスト高山右近は、きわめて高い地位の人であり、日本の貴族階級に属していました。合戦で大きな手柄を立てた右近を、秀吉は大大名に取り立てました。右近は、キリストの教えを広めることを望み、日本人の宣教師やカテキスタを育てるため、安土、高槻、大阪にセミナリオを建てました。領内のキリスト者は、きわめて多くなり、1583 年には、3 万人の領民のうち 2 万 5 千人に達し、人口の大半を占めるほどだったといわれます。ユストは、大阪の教会も創設しました。また領地が明石に変わったとき、福音宣教活動を広げました。1585 年から 1587 年までに、千人以上が洗礼を受けたのです。

残念ながら、1614 年 2 月、一つの法令が発布されました。それはユストと金沢のキリスト信者に対し、信仰を捨てるよう命じるものでした。これを拒んだ右近は、貧しさと孤独に耐える苦しみの時期を迎えることになりました。まず長崎に送られ、フィリピンへの追放を命じられました。1614 年 11 月 8 日、300 人の日本人信者らとともに長崎の港で乗船し、43 日間の長く辛い航海の後、マニラに到着しました。追放と流配によって得た病のために衰弱しきった右近を、1615 年 2 月 3 日、主は、みもとにお召しになりました。マニラに着いてから 44 日後のことです。

フィリピンでは、右近の死を悼む悲しみは、大きなものでした。人びとは、日本の気高いキリスト者の徳と聖性によって感化を受けました。つぎの詩編のことばは、ユストに帰することができます。‘Justus ut palma

florebit' (神に従う人はなつめやしのように茂り 詩編 92.13)、'In memoria aeterna erit justus' (主に従う人は…とこしえに記憶される 詩編 112.6)。

3. 第 2 の問い、キリスト者としての証しが、どのように息づいていたかを考えてみましょう。源泉資料は、ユストがイエス・キリストの使信、その愛のことば、あがないのわざに魅了されていたことを示しています。右近は、その確信により、日本の福音宣教に対する不屈の推進者になりました。ほまれ高く誠実な人として成長したユストは、真のキリストの武人でありました。そのわざにたけた剣ではなく、ことばとわざによる武人です。主イエスへの信頼は、このように、そのところに、しっかりと根を下ろしたのです。迫害されても、流されても、捨てられても強くなりました。ユストは、その特権的な地位を失い、生活の貧しさが増し、打ち捨てられ、隠れた境遇になっても、気落ちするどころか、平静を保ち、洗礼のときの約束に、つねに忠実でした。

またユストは、迫害を受けた多くのキリスト者と同じように、悲劇的な死を予感しました。フィリピンへの航海の間、そしてマニラに着いた後、ユストは理解したのです。主が自分に望んでおられるのは、血を流す殉教ではない。ゆっくりと訪れる死、すなわち流刑による幾多の苦しみによって引き延ばされた死です。これは、いわゆる「追放の苦しみによる殉教」(martyrium ex aerumnis exilii,) なのです。殉教は、いのちを差し出すことだけではありません。十字架に釘付けにされた主の苦しみに与ることでもあります。

キリスト信者への迫害は、決して正当化できるものではないことをユストは、よく理解していました。それは、イエスがヨハネ福音書 15 章 22 節で「人々は理由もなく、私を憎んだ」と仰せられているとおりです。しかしロヨラの聖イグナチオの「霊操」によって育てられたユストは、神のはからいのために、自分自身の望みから離れ去り、それを完全に捨てる生き方をしました。

ユストは福音を、日本文化とは無関係の外的なことがらのように理解していたわけでは決してありません。イエズス会の宣教師の理解に同意していました。すなわち護教的な論争を避けたのです。ユストは、悪と死からの解放のためにいのちを差し出したイエスのことばを告げることだけに集中したのです。生涯最後の数か月、霊操の流れに身を任せました。それは、祈り、秘跡、瞑想、そして宣教師との霊的会話によって支えられていました。

それらのおかげで、ユストは、義に満ちた平静さをもって死を受け入れたのです。自分を迫害する人びとのために祈り、彼らを赦し、日本の回心を念じていのちを捧げて死にました。最初の殉教者ステファノのように、ユストは、イエスの名を呼び、自分の霊を主に委ねました。享年 63。過ごした年月の大半は、不和と迫害が続く困難な時代にあって、キリストへの信仰を卓越した方法で証したのです。

4. 私たちの福者が、教会とすべての信者に何を残したのでしょうか。それは、偉大な信仰の宝です。ユストの信仰は、その存在の核心をなすほど成熟していました。ユストは信仰によって活かされていました。その生涯は、日本人としての生であり、茶の湯を含む日本文化を形成する伝統を大切にしました。茶の湯は、ユストによって人びとの交わりと兄弟姉妹の関わり場の場になりました。

ユストの行動は、まさしく福音的でした。家来たちとともに憐れみを示し、貧しい人びとを助け、困り果てた侍たちには援助を惜しみませんでした。ミゼリコルディアの組をつくり、病人を見舞い、寛大に施をしました。父ダリオとともに、家族のない死者の柩を担ぎ、墓に葬りました。それらすべては、人びとを驚かせ、それに倣いたいとの望みを呼び起こしたのです。

迫害に直面したユストは、「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう」というヨハネ福音書 15 章 20 節に記されたイエスのことばによって照らされました。イエスはご自分を信じる人

びとが担う悲劇の運命の中に不在なのでありません。主は、まさに、その中にこそ、存在していただくことを、ユストは確信していました。ユストは、罪のないキリスト者の嘆きの中に、イエスの受難と死、その復活がもつ新しい意味を見ていたのです。殉教者は、何も失わず、かえって天上のエルサレムに着き、終わりのない至福の中で神と出会うことができると知っていました。

私たちの福者は、自らもまた信仰を証して殉教した使徒パウロのことばに満たされて生きた人です。「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことはできないのです」(ローマ 8,35.38-39)。

殉教者は、実りのない英雄などではありません。友愛と慈愛を告げる確かな使者です。ユスト高山右近の列福は、神がその摂理によって日本と世界の教会の中に蒔く種なのです。大聖レオは、つぎのように記しています。「教会は、迫害によって弱くなるどころか、強められます。教会は、つねに豊かな実りに富む主の畑です。なぜなら、一粒ずつ地に落ちた小麦は、生まれ変わって豊かなものになるからです」。

私たちの福者の模範が、イエス・キリストの福音への信仰と信頼へと、私たちすべてを突き動かしますように。

福者ユスト高山右近、私たちのために祈ってください。

---

1. La comunità cattolica giapponese è in festa per la beatificazione di Justus Takayama Ukon, il suo nobile figlio, martire di Cristo. In lui si avvera la parola di Gesù che dice: «Se il chicco di grano caduto in terra non muore, rimane solo; se invece muore, produce molto frutto» (Gv 12,24). E ancora: «Se hanno perseguitato me, perseguiteranno anche voi» (Gv 15,20).

Come Gesù, il buon pastore innocente, fu imprigionato e condannato a morte, così i suoi discepoli spesso nella storia sono stati perseguitati e uccisi. Dalle prime persecuzioni dell'impero romano a quelle più recenti e ancora in atto in tutti i continenti, l'odio e la crudeltà hanno sempre inquinato il terreno buono della carità, della bontà e della fraternità.

Provvidenzialmente il bene prevale sul male e i martiri diventano i testimoni credibili della civiltà cristiana dell'amore. Inermi, essi affrontano gli aguzzini amandoli e pregando per loro: «Amate i vostri nemici e pregate per i vostri persecutori» (Mt 5,44). Non solo il perdono, ma anche l'amore e la preghiera costituiscono la paradossale ricompensa dei martiri per i loro avversari. Alla ferocia essi rispondono con la gentilezza della carità, dimostrando non debolezza, ma sovrumana forza. In tal modo bonificano l'umanità, prosciugandola dal sangue innocente dei giusti e immettendovi il seme fecondo della vita.

La Chiesa in Giappone è stata benedetta con la splendida testimonianza di numerosi martiri, come, ad esempio, San Paolo Miki e compagni, San Tomaso Nishi e compagni, il beato Pietro Kibe e compagni. Nei martiri giapponesi sono rappresentate tutte le categorie di persone, giovani e anziani, samurai e gente comune, uomini e donne. Il Beato Justus è uno splendido testimone di Cristo, così come furono i primi gloriosi martiri della Chiesa.

2. Ci poniamo ora tre domande: chi era Justus Takayama Ukon? Come viveva la sua identità cristiana? Qual è la sua parola per noi oggi?

Justus Takayama Ukon era un principe di altissimo rango, appartenente alla classe più nobile del Giappone. Per il contributo positivo dato in battaglia, Hideyoshi gli ingrandisce il feudo. Con l'intento di diffondere il cristianesimo, Justus fonda ad Azuchi, a Takatsuki e a Osaka seminari per la formazione di missionari e catechisti giapponesi. Nel suo territorio i cristiani aumentano moltissimo tanto che nel 1583 se ne contano 25.000 su 30.000 abitanti, praticamente la maggioranza della popolazione. Justus fonda anche la chiesa di Osaka. Quando si trasferisce nel feudo di Akashi amplia la sua attività evangelizzatrice: dal 1585 al 1587, furono battezzate un migliaio di persone.

Purtroppo nel febbraio del 1614 fu emanato l'editto che ingiungeva a Justus e ai cristiani di Kanazawa di abbandonare il cristianesimo. Il rifiuto costò a Justus un sofferto periodo di privazioni e di solitudine. Prima deportato a Nagasaki, fu poi condannato all'esilio nelle Filippine. L'8 novembre 1614, insieme con 300 cristiani giapponesi, si imbarcò nel porto di Nagasaki e dopo una lunga e travagliata navigazione durata 43 giorni raggiunse Manila. Indebolito dalle malattie contratte durante la deportazione e l'esilio, Justus si spense a Manila il 3 febbraio 1615, dopo 44 giorni dal suo arrivo.

Il dolore per la morte di Justus fu enorme nelle Filippine. Il popolo era edificato dalle virtù e dalla santità di questo nobile cristiano giapponese. A lui applicò alcuni versetti dei salmi: «Justus ut palma florerebit» (Sal 92,13: Il giusto fiorirà come palma); «In memoria aeterna erit justus» (Sal 112,6: Il giusto sarà sempre ricordato).

3. Alla seconda domanda, su come viveva la testimonianza cristiana, le fonti riferiscono che Justus era affascinato dal messaggio di Gesù Cristo, dalla sua parola di carità e dal suo sacrificio redentore. Fu questa convinzione a trasformarlo in un infaticabile promotore della evangelizzazione del Giappone. Educato all'onore e alla lealtà, fu un autentico guerriero di Cristo, non con le armi di cui era esperto, ma con la parola e l'esempio. La fedeltà al Signore Gesù era così fortemente radicata nel suo cuore, da confortarlo nella persecuzione, nell'esilio, nell'abbandono. La perdita della posizione di privilegio e la riduzione a una vita povera e di nascondimento non lo rastararono, ma lo resero sereno e sempre fedele alle promesse del battesimo.

Anch'egli, come tanti cristiani perseguitati, prevedeva una morte tragica. Durante la navigazione verso le Filippine e dopo l'arrivo a Manila capì che il Signore aveva preparato per lui non un martirio cruento, ma una morte lenta, prolungata dalla mille sofferenze dell'esilio. È il cosiddetto *martyrium ex aerumnis exilii*, un martirio speciale perché testimonia non solo l'offerta della vita, ma anche la partecipazione ai patimenti del Signore inchiodato sulla croce.

Justus era consapevole che la persecuzione dei cristiani non aveva nessuna giustificazione plausibile, proprio come aveva detto Gesù: «Mi hanno odiato senza ragione» (Gv 15,25). Formato, però, alla spiritualità degli Esercizi di Sant'Ignazio di Loyola, visse l'annientamento dei propri desideri e il completo abbandono alla Provvidenza divina.

Justus non considerò mai il Vangelo come una realtà estranea alla cultura giapponese.

D'accordo con l'approccio dei missionari gesuiti, che rifuggivano dalla polemica apologetica, egli puntava esclusi-vamente sull'annuncio della parola di Gesù, che donava la vita per la liberazione dal male e dalla morte. Gli ultimi mesi della sua esistenza furono un continuo corso di esercizi spirituali, ac-compagnato dalla preghiera, dai sacra-menti, dal raccoglimento e dalle con-versazioni spirituali con i missionari.

Con questi sentimenti accolse la morte con la serenità dei giusti. Moriva offrendo la vita per la conversione del Giappone, pregando e perdonando per i suoi per-secutori. Spirò invocando il nome di Gesù e consegnando, come il protomartire Ste-fano, il suo spirito al Signore. Aveva 63 anni, la maggior parte dei quali passati come straordinario testimone della fede cristiana in tempi difficili di contrasti e di persecuzione.

4. Cosa lascia il nostro Beato alla Chiesa e a tutti i cristiani? Egli lascia il tesoro di una fede immensa. La sua fede era maturata a tal punto da diventare l'anima della sua esistenza. Justus viveva di fede. E la viveva da giapponese, valorizzando le tradizioni edificanti della sua cultura, inclusa la cerimonia del tè, che per lui diventò una opportunità di comunione e di fraternità.

Il suo comportamento era autentica-mente evangelico. Era misericordioso con i sudditi, aiutava i poveri, dava il sostenta-mento ai samurai bisognosi. Fondò la confraternita della misericordia. Visitava gli ammalati, era generoso nell'elemosina, portava, assieme al padre Dario, la bara dei defunti, che non avevano famiglia e prov-vedeva a seppellirli. Tutto ciò provocava stupore e desiderio di imitazione.

Di fronte alla persecuzione Justus fu illuminato dalla parola di Gesù: «Se hanno perseguitato me, perseguiteranno anche voi» (Gv 15,20). Era, infatti, convinto che il Signore non era assente, ma presente nel destino tragico dei suoi fedeli. Nel supplizio dei cristiani innocenti, Justus vedeva rinnovata la passione e morte di Gesù, ma anche la sua risurrezione. Era consapevole che i martiri non si perdevano nel nulla, ma approdavano alle sponde della Gerusalemme celeste, all'incontro con Dio in una felicità senza fine.

Il nostro Beato ha vissuto in pieno le parole dell'apostolo Paolo, anch'egli martire della fede: «Chi ci separerà dall'amore di Cristo? Forse la tribolazione, l'angoscia, la persecuzione, la fame, la nudità, il pericolo, la spada? [...] Io sono infatti persuaso che né morte né vita, né angeli né principati, né presente né av-venire, né potenze, né altezza né pro-fondità, né alcun'altra creatura potrà mai separarci dall'amore di Dio, in Cristo Gesù, nostro Signore» (Rm 8,35.38-39).

I martiri non sono eroi inutili, ma messaggeri validi di fratellanza e carità. La beatificazione di Justus Takayama Ukon è il seme evangelico che la Provvidenza sparge nella Chiesa in Giappone e nel mondo. Come dice San Leone Magno: «La Chiesa non è indebolita dalle persecuzioni, al contrario ne è rafforzata. La Chiesa è il campo del Signore che si riveste di una messe sempre ricca, perché i grani che cadono ad uno ad uno rinascono moltiplicati» (LEONE MAGNO, Sermo 82,6 A-B: PL 54,426.).

L'esempio del nostro Beato spinga tutti noi a una vita di fede e di fedeltà al Vangelo di Gesù Cristo.

Beato Justus Takayama Ukon, prega per noi